カワウと向き合う山梨県の一年　いつなにをするか？

谷沢弘将（山梨県水産技術センター）

山梨県のカワウ対策の概要

山梨県では1993年に初めてカワウの飛来が確認されました。1998年に甲府市下曽根町においてねぐらが形成され、2003年には同地点がコロニーとなりました。この間、モニタリングや追い払いは行っていたものの有効な対策は行えず、カワウは右肩上がりに増加していきました（2006年最大845羽）（図1）。2006年より繁殖抑制による個体数調整技術が開発され、100%近い繁殖抑制が可能になりました（図2）。この繁殖抑制を軸に現在まで10年間対策を続けており、カワウの個体数は低位に推移しています（2014年最大435羽）（図1）。この対策における、いくつかのポイントを簡単に説明したいと思います。

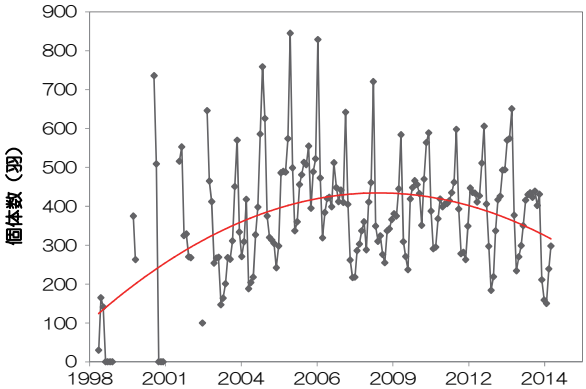


図１．下曽根コロニーの個体数の経年変化

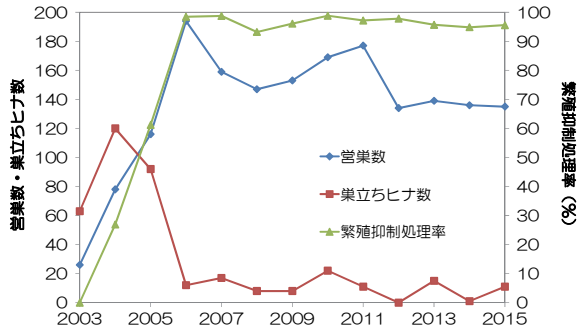
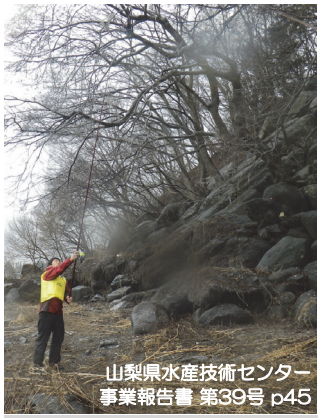


図２．繁殖成績の経年変化

カワウの行動にあわせ「やるときはやる」「休むときは休む」

幸いにもカワウの行動は毎年ほぼ決まっています。それに合わせた対策スケジュールを組むことが最も効率的な方法です。山梨県のカワウ対策の主なスケジュールを図3に示しました。山梨県で新規コロニーができる時期は３～5月。繁殖期は3月～8月（特に3・4月）。アユの被害が大きいのは放流から解禁までの4月～6月。この期間は1年の８割近い労力を費やして新規コロニー除去、繁殖抑制、追い払い等を行う最も大事な期間です。一方、その他の期間は主にモニタリング、データ整理、翌シーズンの準備など比較的余裕をもって行える期間になります。カワウ対策は継続することが非常に大事なので、無理のないスケジュールを組むべきです。



写真．新規コロニーの除去のため、ビニルひもを張るようす

繁殖期はスピードが命

特に新規コロニーの除去については、発見したらすぐに対策を行います。先に延ばせば延ばすほどカワウの執着心は強くなり、労力は倍々に膨らんでいきます。早く行動することが最終的には最も労力のかからない方法です。

毎年データによる評価をする

予算の面では、飛来数と食害額のデータが重要となってきます。食害額の算出に必要な胃内容物は必ず調査するべきです。食害額算出根拠の信憑性が格段に上がります。また、直接カワウ対策を行う漁協にはデータをとりまとめ、報告します。漁協毎に傾向が見え、対策の効率化やモチベーションアップに繋がります。

情報共有は密に！

上記で述べたとおり、カワウ対策はスピードが大事です。そのためにも関係機関との情報共有体制は重要です。山梨県では漁協には広報誌、講習会の実施、成果発表会などを通して連携が図られており、新規コロニーの発見、カワウ動向の情報共有などに役立っています。また、県カワウ協議会によって、国交省、漁連、野鳥の会、花き農水産課、水産技術センター、治水課、みどり自然課、環境事務所の出先担当などと、対策の理解を深めています。過去には関係機関への手続きが長引き、対策に遅れをとることもありましたが、現在はこの会議により円滑に手続きができるようになっています。

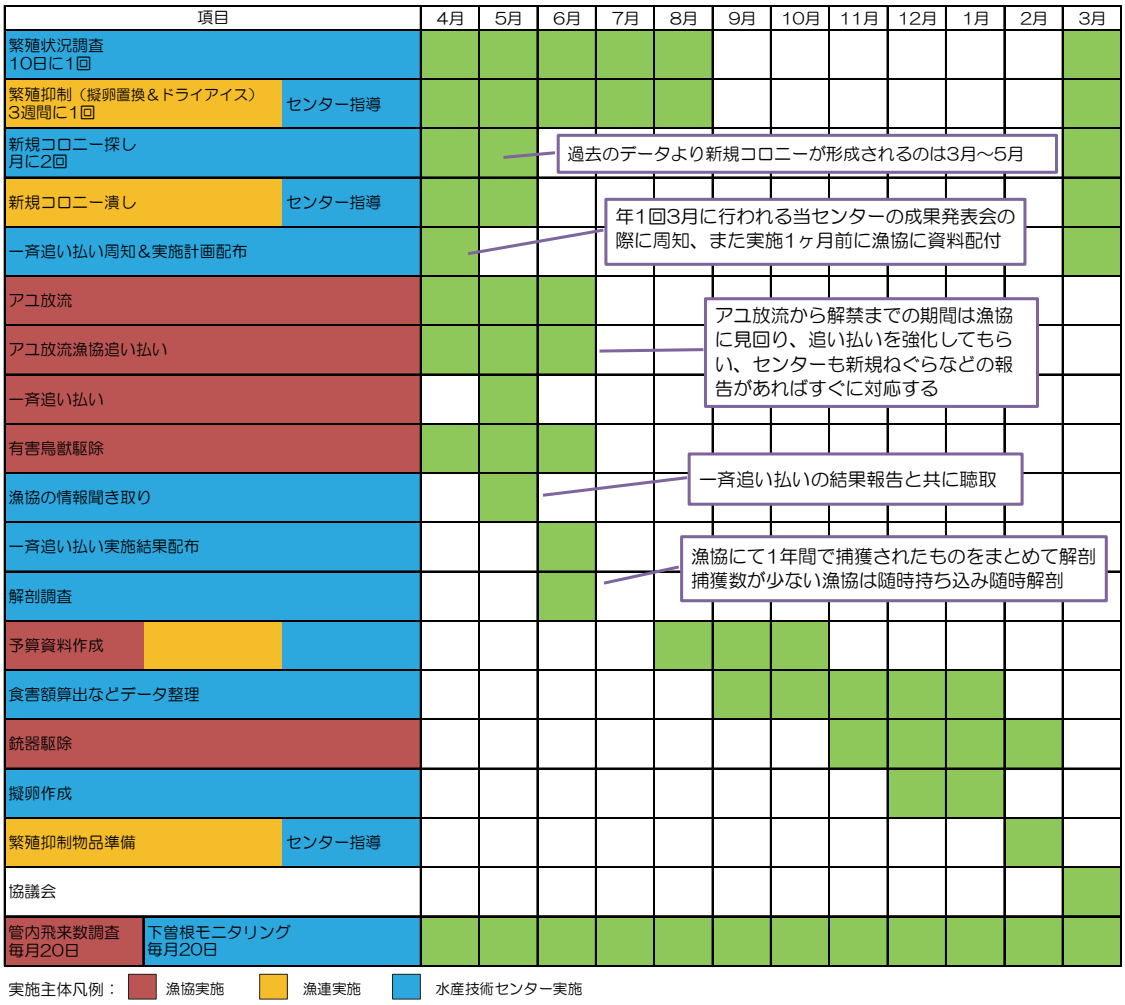


図３．漁協、漁連、水産技術センターのカワウ対策スケジュール